

医療的ケア児と介護者をサポートする 医療型短期入所の開始

当院で8月より開始した障害福祉サービス
「医療型短期入所」についてご紹介します。

介護者の休息に活用できる 医療型短期入所

医療型短期入所とは、在宅で重症心身障がい児を介護する保護者が、一時的に介護することが困難になった際に利用できる障害福祉サービスです。レスパイト(respite＝休息)入院とも呼ばれ、保護者の休養やご家族との時間の確保などに活用できます。病院や専門施設にて行うサービスで、日常生活上のサポートや医療的ケアを実施しています。

医療的ケア児の増加と ニーズの高まり

近年、医療技術の進歩により、人工呼吸器や経管栄養などの医療的ケアを行いながら自宅で療養をする「医療的ケア児」が増えています。こうしたお子さんは24時間のケアが必要となります。目を離した間に医療機器が外れる可能性もあり、生命の危機と隣り合わせの状況なのです。そのため、ご家族は24時間気が張り詰めており休めないということが多くあります。医療型短期入所を行う施設は、大人専用が多く、子ども専用の受け入れ先はニーズの高まりに対してまだまだ不足しています。医療的ケア児への社会的認知が低いことにより、社

会においてニーズが十分に伝わっておらず、行政支援の遅れにつながっていることもその一因だと考えられます。まずは、地域社会にとって必要不可欠なサービスであることを、より多くの方に知っていただくことが重要です。

空きベッドを活用し、医療的 ケア児と介護者をサポート

私たち小児科では、外来診療の際に介護者の皆さんとお話する中で、日々のご苦勞を抱えていらっしゃることを実感する場面が少なくありません。そこで、少しでも介護者の皆さんに心身を休める時間を過ごしていただきたいという思いから、空きベッドを活用した医療型短期入所を開始しました。

対象は中学3年生までのお子さんで、排泄・シャワー浴・口腔ケアなどの日常生活支援と健康チェックや経管栄養などの医療的ケアを実施します。当院は急性期病院であるため、受け



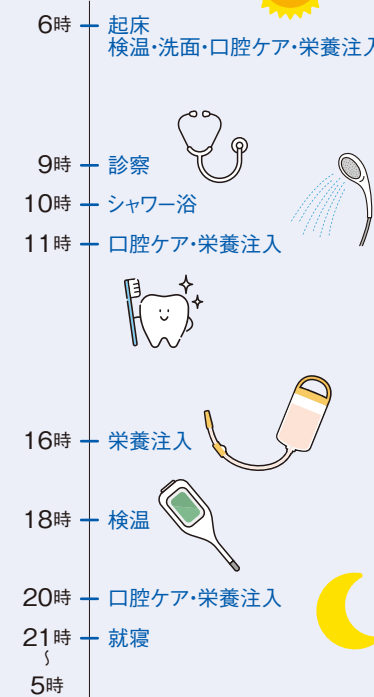
小児科
小児科第一部長兼新生児内科部長
石田 敦士
岐阜県立多治見病院



入れ人数には限りがありますが、社会的使命として医療型短期入所に取り組んでいます。

将来的には、より環境を整え、受け入れ体制を拡充し、地域の介護者の皆さんに寄り添える病院にしていけることが目標です。この取り組みが社会全体に広がり、医療的ケア児とそのご家族を支える一助となることを願っています。

1日の流れ(例)



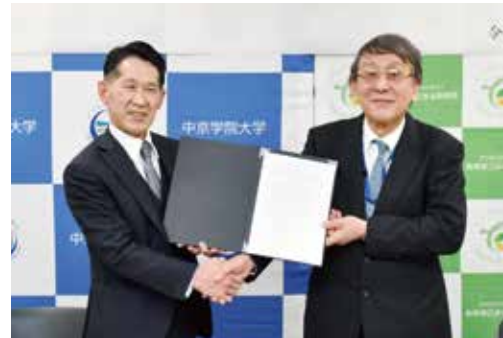
医療型短期入所
について
詳しくはこちら



TOPICS 多治見病院から、お知らせです

中京学院大学と 看護師育成に向けた連携協定を締結しました

2025年3月19日、学校法人中京学院 中京学院大学と地方独立行政法人 岐阜県立多治見病院は、医療現場で求められる看護師の育成・確保を目的とした【地域の看護師育成と確保に関する協定】を締結しました。本協定により、両機関は教育と実践の両面から看護師の人材育成に取り組み、地域医療の充実と質の向上を目指します。



市民公開講座を開催しました

2025年8月30日、パロー文化ホールにて市民公開講座「脳にいいこと始めませんか?～認知症の予防と治療～」を開催しました。当日は、名古屋大学 脳とこころの研究センターの小倉 礼先生を講師にお迎えし、認知症の予防や最新の治療法について、わかりやすくご講演いただきました。参加者からは「認知症への不安が少し和らいだ」「予防の為に生活習慣を見直したい」といった声が寄せられ、盛況のうちに終了しました。今後も、地域の皆さんの健康づくりに役立つ情報発信に努めてまいります。



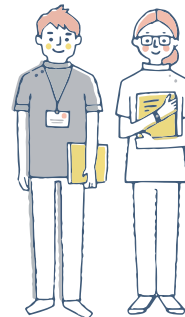
当院は国が定めた研修指定病院です。

当院は岐阜県東濃圏域の基幹病院として、
地域の医療の核となる医師の育成を目指しています。

当院では、上級医の指導の下に研修医(医師免許を取得後1年目、2年目の医師)が診療を行っています。

将来の医療を担う医師を養成するために、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

院長



地方独立行政法人

岐阜県立多治見病院

〒507-8522 岐阜県多治見市前畑町5丁目161番地
TEL:0572-22-5311 FAX:0572-25-1246

公式
ホームページ



岐阜県立多治見病院 vol. **50** 2025年9月

ご自由
にお持
ち
くだ
さい

けんびょういん

基本理念 安全で、やさしく、あたたかい医療に努めます

小児科

介護者をサポートする「医療型短期入所」



岐阜県内初導入！ 手術支援ロボット「Mako」

手術の安全性・正確性を高める「Mako」についてご紹介します。

整形外科
副院長兼整形外科第一部長
高津 哲郎
岐阜県立多治見病院



正しい位置で正確に 骨を切ることのできる 手術支援ロボットMako

整形外科では、怪我や加齢などによって起こる運動器の疾患・外傷を対象に治療を行っています。骨折など外傷治療のほかに、脊椎脊髄外科、手の外科、関節外科、骨軟部腫瘍外科など幅広い診療領域をカバーしているのが当科の特徴です。

今回、股関節・膝関節の手術を支援するロボット「Mako（メイコー）」を岐阜県内で初めて導入しました（2025年8月現在）。骨を削る機器がロボティックアームに取り付けられており、それを正しい位置に誘導して正確に骨を削ることができます。術前計画ではCTデータをもとに患者さんの骨格の情報をコンピュータに入力し、インプラント（人工関節）のサイズや設置する位置、骨を切除する角度や量などを決定。手術中はロボットが手術器具を正しい位置に導き、術者が計画から逸れた位置に動かそうとすると自動的に制御するため、骨のまわりにある神経や血管、靱帯などの組織を保護でき、正確かつ安全な手術が可能となります。また、骨を削りながらデータを取り実際の数値を出していくため、計画通りに切れているのかを確認したり、手術中の状態に応じて計画を変更して微調整し

たりすることが可能です。モニター上で数値や今の状況を見ることができるので、靱帯のバランス調整もしやすいのが大きなメリットとなっています。正確性の面でも大きく貢献してくれるロボットです。

ROSAとMakoを 活用しながら より正確に、安全に

当科では2022年に人工膝関節置換術の支援ロボット「ROSA（ロザ）」を導入しています。ROSAは、手術中に具体的な位置や角度を示してくれるナビゲーションシステムとロボットの中間のような機能を持ち、手術中に計測した靱帯バランスに対応させた正しい位置で骨を切るためのサポートをしてくれます。実際に切るのは術者ですが、正しく切れたかどうかを確認する機能があるので安心です。患者さんの体格や骨の形には個人差があり、骨のサイズ感、変形の仕方などによって合うインプラントが異なります。一人ひとりの骨の状態を確認して合うインプラントを決定し、そのインプラントに適合するロボットを選んでいきますので、2つのロボットを活用しながら正確で安全な手術を実施していけたらと考えています。



Mako導入で関節機能の 安定と満足度向上を目指す

人工膝関節術には「全置換」と「部分置換」があり、関節障害の程度に応じて適切な術式を選択します。これまで当院ではROSAを用いた全置換術を行ってきましたが、新たに導入したMakoは部分置換にも対応しているため、今後は部分置換にもロボットを活用していく予定です。

米国や豪州など諸外国の先行研究では、ロボティックアームを用いた人工関節置換術により、インプラントの設置精度と手術手技の安全性が向上し、長期的な成績の改善や再置換率の低下が得られたと報告されています。

当院でも引き続き、手術支援ロボットを活用しながら、手術の正確性と安全性、そして患者さんの満足度向上につながる医療を目指してまいります。

医療機器のスペシャリスト 治療を支える臨床工学部

医療機器の専門医療職「臨床工学技士」の業務内容についてご紹介します。

臨床工学部
臨床工学部技師長心得
藁島 靖丈
岐阜県立多治見病院



医療機器のスペシャリスト 「臨床工学技士」

当院の臨床工学部には、心臓血管外科医の部長をはじめ、23名の臨床工学技士が在籍しています。

臨床工学技士は、医療機器の安全性と有効性を保つために、保守・点検・管理を行う専門職です。人工呼吸器や透析装置などの生命維持装置の操作も担当し、患者さんの命を支える重要な役割を担っています。

当院の臨床工学部の特徴は、スタッフがローテーションで全ての業務に携わっていることです。幅広い知識と技術が求められるため、習得には時間がかかりますが、一人ひとりが多様な業務に対応できることで、緊急手術や検査など、急な対応が必要な場面でも柔軟にサポートできる体制を整えています。



患者さんの命をつなぐ やりがいのある仕事

当院の臨床工学部における業務は大きく分けて2つあります。

①医療機器管理業務
人工呼吸器や輸液ポンプ、パルスオキシメータなど、医師が治療で使用するものから看護師が病棟で使用するものまで、病院で使用されるさまざまな機器の一元管理、保守、点検を行い、安全性を確認したうえで貸出を行っています。手術中に機器の不具合が起きた際も、すぐに対応できる体制を整えています。



②臨床技術提供業務
人の呼吸・循環・代謝といった生命維持に欠かせない機能を代行する「生命維持管理装置」の操作を行うことで診療のサポートを行います。人工透析の対応やペースメーカー手術の立ち会い、血管カテーテル治療、内視鏡手術のサポートなど、診療現場で生命維持装置を操作し、医師の治療を支えます。たとえば心臓手術では、患者さんの心臓を一時的に停止させて行うことが多く、その間は人工心肺装置が心臓と肺の働きを代わりに担います。この装置の操作を担当するのが

臨床工学技士であり、命に直結する責任ある役割を担っています。

医療に工学が関わる特殊な仕事で、かつ、私たちにしかできない仕事でもあるので、それが大きなやりがいでもあります。治療や手術において直接患者さんに関わりますので、元気になる姿を見ることも、この仕事のやりがいのひとつです。

タスクシェア・タスクシフトで 広がる可能性

近年、医療現場では「タスクシェア・タスクシフト」の動きが広がっています。これは、医師や看護師の業務の一部を他職種が担うことで、医療チーム全体の効率を高める取り組みです。この流れの中で、臨床工学技士の役割はますます重要になっています。当院でも、臨床工学技士ができる業務を積極的に担い、医療現場の負担軽減と質の向上に貢献していきたいと考えています。



多治見病院の研修医

当院では毎年研修医を受け入れており、研修医は基本的診療能力を習得するために日々研修に励んでいます。
今回は、1年目の研修医の声ををご紹介します。

研修医の /
NEW FACE!



1年目 研修医 永井 航太

Q.多治見病院を選んだ理由を教えてください

A.当院は東濃可見地域において唯一の三次救急病院で、幅広い症例を経験することができるのが理由の一つです。見学だけでなく検査の手技などを実践できる環境が整っており、医師に必要な力を身につけられるところもポイントでした。また、ローテートする科を自分で選ぶことができ、将来を見据えながら学べる点も魅力です。現場では、積極的に手を挙げるとさまざまな治療に携わることができる風土があるのも当院のいいところだと思います。

Q.研修医の1日の流れを教えてください

A.2年次の研修医の先輩や救急の先生による朝の勉強会からスタートします。次にローテート業務に入り、カンファレンスへの参加や、担当患者さんの回診を行い、その内容を上級医の先生方と共有しています。検査や治療が始ま



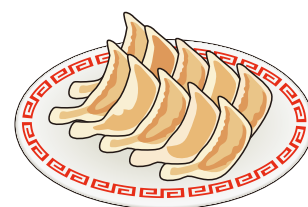
ると、見学や手技の練習の機会もいただいております。休憩時間には、研修医同士で診療の練習をしたり救急対応の流れを確認し合ったりと、日々研鑽に励んでいます。

Q.研修で心がけていることを教えてください

A.心身ともにご負担のある患者さんに寄り添い、少しでも安心していただけるような診療やコミュニケーションを心がけています。患者さんが元気になって退院される姿を見ることが一番のやりがいです。

Q.今、力を入れて取り組んでいることは何ですか？

A.救急外来における業務です。当院では、救急外来にて医師が最初に行う診察や判断のことを指す「ファーストタッチ」を研修医が担当しています。バイタルサインのチェックから始まり、必要な検査を選び、治療につなげていきます。少しずつできる手技が増えてきて、自信を持って対応できるようになりました。



大学時代に住んでいた板木の餃子が大好きです！

Q.研修の中で印象深かったことは何ですか？

A.検査というとCTなどの画像検査が有用だと思われがちですが、まずは問診や身体診察が重要であると学びました。例えば症状が現れる部位・範囲や腱反射の程度から、原因が神経なのか筋肉なのか、おおまかに判断することができます。それにより不必要な被曝や侵襲の高い検査を避け、患者さんの負担を減らし、結果的に質の高い医療を提供することができます。日頃から漫然と検査を行うのではなく、人体構造や病態の理解を深める必要があると学びました。

Q.目標を教えてください

A.まずは来年、後輩に指導できるような先輩になることが目標です。将来は地方の病院や診療所で働く予定なので、限られた人員や機器の中でもしっかりと対応できる力を身につけたいと思っています。研修では、自分ひとりのできることを少しずつ増やしていけるよう、日々スキルを磨いていきたいです。